

## 余話

### 漫画本と綴本

現代という時代は恐ろしいばかりの速さで変化する。昨日まで珍重されていた品物や生活用品、さらに、思想や価値観までもが列車の窓外を過ぎ去る景色のように忘れ去られ、人々は次々と新しい事象に目を移して行く。巷にはあらゆる品物が満ち溢れ、省エネや再利用が叫ばれている世にあっても、過剰な消費促す情報社会の中で経済が万能な顔を利かせて闊歩している。

このような風潮の中で、多くの人々は流行の中に無抵抗に漂っている。その結果、成長の途次にある若者の周りには、電子機器がまるで神器のように整えられ、それと対をなすように刹那的興奮しかもたらさない漫画本が、精神の形成とは縁遠いところで、身近に置かれている。人間は環境に支配され易い動物であると云われる。現代社会を俯瞰すると残念ながら次元の低いテレビの番組は、人間しか持ち合わせない尊い真面目さや一所懸命さを事もあるうに笑いの種とし、浅薄な内容の出版物は自由を免罪符として道義を混乱させているように私には思えて仕方がない。

その結果、少なからぬ若者は、低俗本を他人の面前で平然と読み

耽り、漫画本を見ることを読書と信じて疑わない価値判断の誤りを  
おかしている。

私は何冊かの和綴本を持っている。学生時代に尊敬していた漢文  
の教授後に総長となるに「これこれのものが見つかったら必ず買い  
求めて置くように」と薦められたものである。書籍には江戸後期、

明治の初中期の和綴じの木版本も数冊あり、教職を生業なりわいとしていた  
者にとっては原典にあたる上で貴重なものになった。和綴本は、当  
時のこととて漢籍や崩し字の版本が多く、書名は省略するが、興味  
惹かれるものも多く、中でも感銘を受けたのは、これらの書籍は実  
際に学びの場で使われたもので、当時の若者が学問に勤しんだ痕跡いそ  
が手垢やシミと共に残っていることであつた。

この本を使った当時の人達は本は宝ものに等しく、ランプやロー  
ソクの不十分な灯かりの元で一心に書写し、一字一句を自分の血肉  
にしていったに違いないと想像できる。これらの人々こそわが国の  
黎明期に内外に飛翔し、人類に貢献した人達であつたのである。換  
言すれば、今日の繁栄はこれらの人々のひたむきな努力と勤勉さ、  
さらに、誠実さと礼節がもたらしたものとと言っても過言ではないで  
はない。

戦後、世のありようは大きく変わった。敗戦直後、大人たちは衣、食、住の確保に奔走し、子どもたちの周りからは兵隊さんの出てくる絵本や漫画は消えた。その何もなくなくなった空洞に進駐軍が残していったものは、ふきだ噴出しに英語が入ったコミック漫画であった。「ジャック・アンド・ベティー」、「ベティーさん」、「ポパイ」などである。

戦後の子どもたちは初めて接した異文化に驚きながら、ボロボロになった本を画面の展開で判断し夢中で見たものであった。その変化を否定したり議論の具にしたりすることは、結論の出ない抽象論になってしまいそうなので深入りしないことにするが、当時の漫画のストーリーにはエロやグロや残酷性がなく、一過性の笑いで過ごせるものが大部分であったように思う。間もなく登場する日本の漫画も始めは「フクちゃん」、「サザエさん」のような四コマ構成で起承転結さえ感じられた。手塚治虫氏の漫画は私が初めて見た単行本漫画であったが、勧善懲悪の筋立ては子どもにも理解ができた。この頃、中学生になっていた私は漫画本から吉川英治氏の活字本に移り、「宮本武蔵」、「新・平家物語」などを読み耽った。これらのストーリーには血の通った感情を持った人間が登場し、私を物語の登場人物の一人として参加させてくれた。意味の解らないところもあった

が、それぞれに登場人物は精一杯生きていたという印象が残る。

本屋さんの数は急速に減少しているといわれる。かつては知性が集った駅前の本屋さんも、郊外のスーパーマーケットの片隅に追いやられた。もつとも、インターネットで注文すれば二、三日で新刊本が手に入る時代だから不都合は感じないのだが、その新刊本のジャンルと出版される目的の多さに驚かされる。それらの中から毎年芥川賞や直木賞、その他の作品が選ばれて話題になるが、正直のところ最近の作品の内容は極めて解りにくい。さらに穿った見方をすると話題作は、出版社の事前の宣伝によって作為としてもたらされたものではないかとさえ思える。その根拠はある有名な「賞」の講評に「この作品の面白さは、作者は何が云いたいのかわからないところが魅力である」とあって、私のみならず多くの読者を驚かせたはずである。基本的に読書とは意味が理解できなければ面白いはずはない。審査員の方々は沢山の本を読み、才能に恵まれた集団に違いない。したがって、玄人好みくろうとのを嗜好しこうするかも知れないが、読者は利害に関係のない一般の人である。もし、この説が的を射ているとすれば、今後、日本の文学界は危うい。

先に私は何冊かの和綴本を持っていると書いたが、何冊か挙げて

みると、徒然草講義全、文章軌範評林読本続、子規遺稿「竹の里歌」〔初版本〕駿台雑話全など、すべては明治時代以降のものである。和綴本の面白さと貴重さは漢語に文語が混じっていることであろうか。しかも、文法的に誤りがない。現代の我々が使う曖昧な揺れがないのである。明治中期といえば鴎外や漱石を代表格として、詩、短歌、俳句、評論、戯曲など多方面の部門で多くの文人を世に出した。言わばわが国近代文学界の黎明期にあたる。

私を含めて現代人は言葉の遣い方が少々雑になっているのではないかと思うことがある。パソコンという機器は、文章の生産性という意味では効率は良いが、文法の誤りには待ったをかけてはくれない。この点和綴本の語句の遣い方は時代という荒波を何度も潜り抜けながらも、文末の微妙な表現を今日に残している。重要なものは漢語や文語の良さは表現された結果よりも、思考という不易の中に存在するものなのかも知れない。人間らしく生き、自分をみつめさせてくれる第三の目を育てるものが、漫画本でないということだけは確かだと信じている。